

関西大学所蔵

『田豆の毛衣』抄

関西大学図書館 手紙を読む会

一 はじめに

今回翻刻する『田豆の毛衣』は、中村幸彦文庫の中に納められた資料で、中村幸彦文庫は、本学図書館が有するコレクションの中でも国内外から非常に高い評価を受けているコレクションである。

中村幸彦（一九一〇―一九九八）は日本近世文学の研究で知られ、一九七三年十月から一九七九年四月まで本学図書館長を務めた。本学図書館は平成一三（二〇〇一）年に中村先生の蔵書を譲渡され、「中村幸彦文庫」を創立した。なお、それ以前に、国文学研究資料館には中村先生の数多くの蔵書がマイクロフィルム化されて納められている。また中村先生の地元淡路島の洲本市立図書館や、母校である旧制洲本中学校（現・兵庫県立洲本高等学校）にも、先生の蔵書が寄贈されている。

「田豆」とは「鶴」のことであり、「田豆の毛衣」とは、鶴の羽毛を衣に例えた表現である。昔から鶴は長寿であることから慶賀を意味し、「田豆の毛衣」は、子を思う情深さから愛情を込めて着せた産着、白い着物などの意味として、さまざまな歌に使われてきた。

著者である村田春門（一七六五―一八三六）は、伊勢白子生まれの国学者で本居宣長の門人である。号の一つを「田鶴舎」といった。

翻刻資料は七冊から成っており、それぞれ「春」「夏」「秋」「冬」「恋」「雑」「文章」の外題がついている。また、第一冊の巻頭には「春門翁家集」と

ある。七冊の他に、多治比郁夫氏（一九三二―二〇一六）より中村先生に宛てた書簡一通と、中村先生が書店で求めた際の書店販売箋一枚および書店の納品書一枚を付す。書店の納品書の裏面には、中村先生の手で「此書各冊初め数葉は村田春門の自筆也 昭和三十九年六月見之」とある。

多治比郁夫氏は、山口図書館の郷土資料部員から一九五七年六月に関西大学図書館に入り、その後大阪府立図書館にて勤務した。勤務の傍ら、日本近世文学研究やさまざまな翻刻を成している。

多治比氏のご遺族の了承を得て、氏の中村先生宛書簡を以下に掲載する。「永々と拝借いたしておりました「田頭能毛古呂裳」七冊、幸便に托しご返送申し上げます。歌二、二八四首、文四五篇を収め、しかも春門自らが編集したものと考えられますので、よくぞ伝存していたものと、驚いたりよろこんだりして拝見いたしました。まことに有難うございました。春門のこと、せっかくの機会ですから少しずつ調べているうち、何や彼と興味が出て来ました。こゝ二、三日大雷雨にて少々涼しくなっておりますが、また猛烈な暑さになるものと思われまふ。くれぐれもご自愛下さいませよう。

七月廿五日

多治比郁夫

中村先生」

なお、今回は時間と紙面の関係で、春門の自筆と思われる部分（春第一―六丁、夏第一―三丁、秋第一―四丁、冬第一―六丁、恋第一・三丁、雑第一―二丁、文章第一―七丁、合計三十丁）のみ翻刻した。しかし、春門の自筆であるかどうかの判定は非常に難しく、この部分以外についても春門筆の可能性は十分にあると思われるため、後考を俟ちたい。

最後に、これまで関西大学図書館手紙を読む会では、関西大学図書館が所蔵する村田春門、村田嘉言、萩原廣道関連の資料を翻刻してきたが、平成三〇（二〇一八）年八月に助言者である森川彰先生が世を去られ、その後は我々だけで読み進めてきた。

助言者のない我々にとっては、今回の翻刻は甚だ心許なく、これでよい

のだろうかと常に不安を感じながらの作業であった。しかし、幸運なことに肥田晴三氏に本原稿を確認いただくことができた。安堵していたところ、令和三（二〇二一）年二月二十二日に肥田先生が逝去されたとの報に接した。改めて先生の温かいご指導に感謝申し上げたい。先生のご冥福をお祈りする。

○関西大学図書館手紙を読む会のメンバーは、以下の通りである。

池尻孝子、鵜飼香織、田中純子、中川敏子、長谷章子、瓢野由美子、福嶋真奈、八尾奈緒美（五〇音順）

二 書誌

『田豆の毛衣』七巻 「村田」春門「著」 「書写者不明」 写本

資料ID：210232242～210232307 請求記号：L24*23.95*1～7

大きさ：266×19.2cm 大本七冊

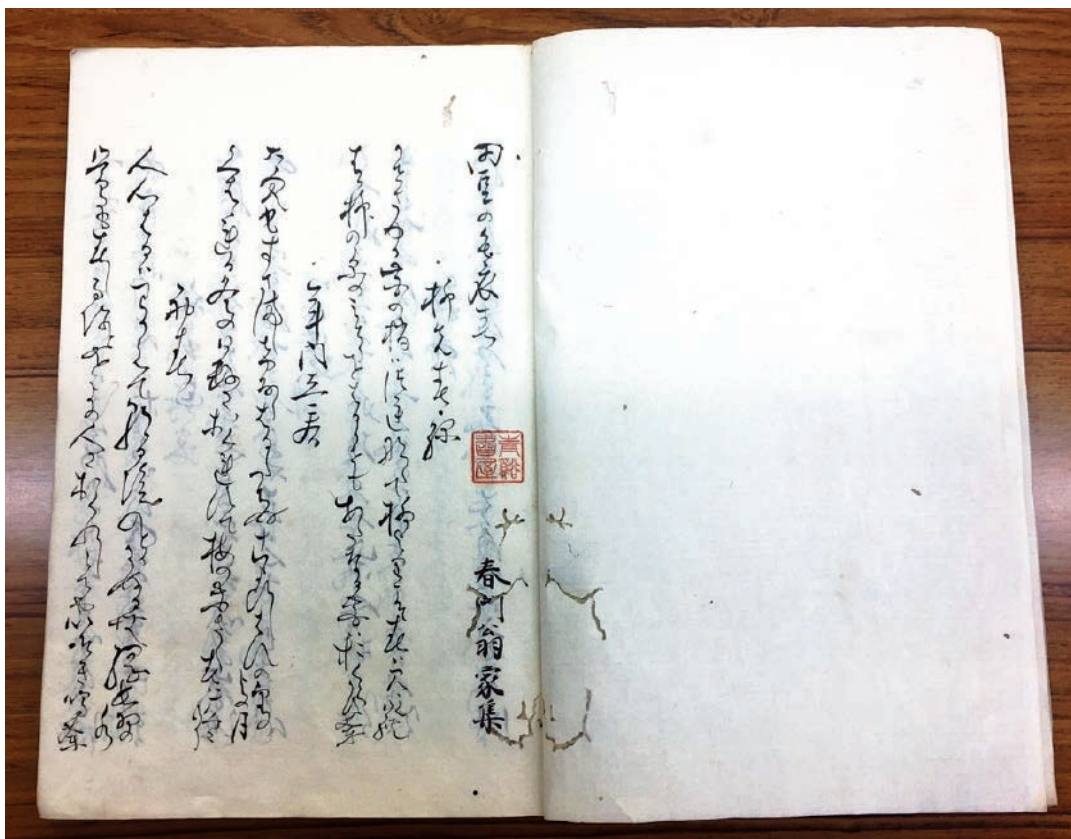
印記：青谿書屋（大島雅太郎）

三 凡例

翻刻については、次の要領に従った。

- ・漢字は、原則として常用漢字に改めた。
- ・仮名は、原則として片仮名及び平仮名を用い、変体仮名は平仮名に改めた。
- ・踊り字はそのままにした。
- ・破損、虫害、判読不能は□で示した。推測できる場合は□の中に字を入れた。
- ・難読字は（ ）でかなを付した。
- ・丁移りは「」で示し、上に丁数と表（オ）、裏（ウ）と明記した。
- ・歌は一字下げとした。

・「剣」「蘭」「南」と表記された助詞は、それぞれ「けん」「らん」「なん」とした。



第一冊 春

田豆の毛衣春

春門翁家集

柳先春緑

かせさゆる 花の梢ハ つれなくて 柳よりこそ 春ハ見えけれ
青柳の 糸のミとりを はるかせるも あたなる花ハ おくらからん

年内立春

大空も すさましけなく はるたちぬ こよひしはすの 望のよの月
くは、れる 冬の日数に おくれすて 梅の花さく 春ハ来にけり

初春

人心 はるハわかえて 朝日陰 のとかにぬるむ 綱^(つな)長^(なが)ゐの水
鶯も 春しることを よの人に おくれしとてや いそき鳴らん

1才

うへしこそ 春たちけらし 今朝よりハ 雪ともいはす 霞棚引
冬かけて 咲しうめとも おもほえず 年あらたなる 花のかそする

初春雨

今朝よりハ ほのかすみて しら雪を 雨に吹なす 嶺の春かせ
冬こもる 萱ねの虫に ふる雨や 春の心を しらせそむらん

若菜

はつかなる 雪間のわかな つとにして 山里人そ おとろかしける
きえやらぬ 沢の水も 一くさの 若なにましへ けふそつミける

疑冬

朝日さす きしの山ふき 露ちりて はる風ぬるむ 里の中川

1ウ

ともからも いはぬ色なる 山ふきの 花のさかりを 人そとひくる

苗代

堰わけし 水の蛙子の あさみとり こなたかなたに もゆるなはしろ

いくはくの 秋のたのみか こもるらん た、一町の 里のなはしろ

寄花懷旧

花のかハ た、それなから いたつらに としをかさぬる 庭の春風
花も木も 今ハおいけり かそへこし 春いく春の わすれかたミも

翠柳誰処

朝霞 みとりむらこに ミゆめるハ たかすむ里の 門の青柳
たか家と しらすともよし 手をりてむ 柳かつらく 春のすさみに

2才

関花

其名のミ 今ものこりて す、か路の 関山桜 人をとめけり
ことならハ かせをもとめよ さくら花 今さかりなる 春のせきもり

花の、ちみとりふかし

おもかけハ ちらぬ桜の 深ミとり 心もおかす かせのふくらむ
根にかへる 花の跡をも したひ来て ふるき瑞枝と 山かせそふく

杜若

夕日陰 な、めにかゝる 柴はしの 下むらこなる かきつはたかな
杜若 花さく沢を 行水の 春あさからぬ 色そにほへる

樹陰夏道

2ウ

是にのミ 春そのこれる さくら木も このくれしけき 山吹の花
若はさす 春の木末の なひきにも 夏をもよほす 風そしらる、

暮春興

ほと、きす 松のわか芽も たちのひて ほとなき夏の けしきはミけり
山つとの わらひも今ハ はるたけて 松かけつ、し 折ましへつ、

紅梅のうつろひかたなるを

佐保姫の かすみの袖も 今めきし うめの色かも うつる春の日
あやかりて 齋^(いさ)の花も にほふらし こき紅の うめの下かけ

紅梅を

おほかたハ　しろきをめつる　ものなから　こをはいかにと　人のいふらむ

3才

紅の　うめの下ゆく　水鳥の　青はもにほふ　はるかせそふく

ふるさとに葦のさきたるを

つむ人も　なきふるさとの　坪すみれ　あはれ色こく　咲にける哉

すみれ草　今ハふりにし　宮人の　袖のゆかりの　色そめてたき

柳に鶯のなくを

うくひすの　うめにならへる　あをやきに　笠にぬふてふ　糸やよるらん

鶯の　来なく柳の　かよひ路を　吹まとはせる　春の夕かせ

さくらの枝にひさこつけたるうた

山もりも　たゝ一枝ハ　ゆるすらん　賤のすさひの　花のしら波

花の色の　にほひてあそふ　はるの日も　かたふきにけり　天の吉葛(よきづら)

3ウ

元日草つくし

草の名に　かけし初日の　光より　はるの色をも　つくしつるかな

さほ姫の　心つくしの　はる霞　にほひそめけり　はつ草の花

春漸暖

霜とくる　軒のしづくも　あたゝかに　朝日かけろふ　空そのときき

北窓を　ひらきそむれハ　うめかゝの　先朝いをそ　おとろかしける

待花

ことさらに　おもほゆる哉　花をまつ　心ハふりし　心なからに

おもかけの　雪ハかすみて　さくら花　待につれなく　さゆる山かせ

水辺花

4才

夕かけて　舟さしゆけハ　大井川　空にも花の　波ぞかすめる

わか宿の　一本さくら　咲そめて　にほひなかるゝ　庭のやり水

春風

やはらきし　音吹かへて　をりくハ　雪をもさそふ　松の春かせ

花鳥の　色ねのとけく　なり行も　春ふくかせの　心なるらむ

春江眺望

うめの花　かこめにちりて　なかれ江の　南のきし□　さわくかりかね

浅みとり　なひきあひけり　江わたしに　かすむ向の　きしの青柳

買梅花

市人の　たつきはかりハ　ゆるすらん　なく鶯の　宿のうめかえ

4ウ

乞よれハ　わかものならぬ　春かせの　あたひをつのる　軒のうめかゝ

籠中鶯

このうちに　絶すさへつる　鶯に　世ハ春なりと　誰かつけけん

ほともなき　籠にこめられて　鶯ハ　おのか声から　身をうらむらん

池水春月

月のミハ　さすかに見えて　よもハ皆　かすミはてたる　広沢の池

水鳥の　床の玉もゝ　はるのよハ　光しつけき　月のわの池

折蕨

もえいつる　谷のさわらひ　をりくハ　来てもとへかし　春の山里

かさわけて　荊のもとの　初わらひ　をる手にはらふ　露そぬるめる

5才

春曙

竹ふかき　ねくらいつらん　鶯の　花にやとらぬ　あけほのゝこゑ

山のはの　月ハ霞に　をさまりて　松のひまさへ　しらむあけほの

小草の花をつむ

草の花　つミをかしけり　春の野の　こてふの夢の　すかり所を

秋萩の　わかめをさへに　むらさきの　すみれの花に　つミましへつゝ

弥生のはしめ山路をゆく

春霞　ふかき山路に　たのめたる　人ありけなる　鳥の声哉

さわらひを　手ことにをりて　さくら花　さかぬをかこつ　春の山越

春光遍

5ウ」

梅桜 はなハかつさく 花ならぬ 木のめもかをる 春風そふく

つくはねの 雲もそかをる すみた川 堤のさくら 咲つゝく頃

柴おへる人花のかけにたゝすめり

おのかとる 斧にもれたる さくら花 春ハさすかに めつる山人

身におはぬ かこそハ袖に うつるらめ 花の木かけの はるの山人

弥生の五日の日雨ふりけるにおまへの池のさく

らさかりなるを見給ふ御かたはらに

侍りて人々とゝもによみて奉る

海山の けしきも池に うきしまの 雨しつかなる 花の色かな

雨かすむ 空のけしきも きはやかに 花にならへる 庭のときは木

6オ」

めさましき わかかへるての 色なれや 雨にぬふれる 花の夕くれ

花光水に漂

溪川を 春そなかるゝ 山吹も さくらも松も 色をましへて

池のへの 花のにしきの さゝらかた 波のあやをハ 風そおりける

東風解氷

はるかぜや 氷とくらん さゝ波の 松かねあらふ 滋賀の辛崎

初春待花

鶯の 春つけそむる あしたより またるゝものハ うくひすの声

野雲雀

いく度か のへのひはりハ 大空に のほりもはてす をちかへるらむ

6ウ」

第二冊 夏

田豆の毛衣夏

郭公数声

郭公 今ハこゑせぬ さとハあらし よるひるわかつ 鳴て過らん

こゑくゝに うたて鳴哉 またれぬハ 栄なきものを 山ほとゝきす

首夏惜春

咲のこる 花をそかこつ つれもなき 春の日数を かそへつくして

こらえむと わかはとひくき 鶯は 峰にとまらぬ 春や尋ぬる

しめの外に 春をへたてゝ かきつはた ゆかりの色に にほふはかなさ

夏草

ちらさしと 露のしら玉 巻こめて 蓮のわかはや 池にたつらむ

1オ」

〔草〕もふかく 生にける哉 かせたにも かよふひまなき 庭の夏草

う月に鶯のなくを

卯の花の かきねの雪を ほたしにて 山へもいらて 鶯の啼

河辺夏月

ゆく水に あらそひかちて かはかみの 山のはしらむ 夏のよの月

夕鵜河

ゆふ月の 光をさまる 河波に うかひのかゝり せり出□にけり

山陰ハ はやくくれぬと よしの川 うかひ友よふ 声そとよめる

夏動物

山とよミ なく蟬よりも 耳もとの 蚊のほそこゑそ いふせかりける

待夕立

ゆふたちを 松のあらしの 吹おちて けふさへよそに なる神の音

すゝしさハ さすかに□へて こゝまでハ まつにかゝらぬ 夕立の雲

炎熱

末葉たに なひかさりけり なよ竹も その名はかりの 水無月の空

日さかりハ 水さへわきて 飛鳥の 影もうつらぬ けふのいふせさ

涼風動簾

月をまつ 軒のいやすを うこかして いよくゝすゝしき 風そふきくる
すゝしさハ 簾に見えて あつき日に うみし心も うこく夕かせ

樹間夏月

2才

霜ならぬ 光さやけく 松の葉の うはしらみたる 夏のよの月
夕立の 露もすゝしく 木の間より 月さしいつる かさゝきの声

池上蓮

いけ水ハ 見えすしけれは はちす葉も 月やとれとて 露むすふらん
花の色も 朝日にはえて かをりけり 露の玉まく 池のはちすは

水無月つこもりの日

あすたゝむ 秋ともいはす つれなくて 夏にあまれる あつさなりけり
夕かせは さすかに涼し けふのミか 秋も夏見の かはといへとも

瀬辺蛭多

ほたるとふ せたのわたりと おもふ間に 星のはやしに 夏ハ来にけり

2ウ

いかゝさき 舟こきゆけハ 芦のはに すかるほたるそ 玉とちりける

松下流水

せきいれて 秋をそめつる 松かせの あつさをあらふ 山川の水
夏の日に わきかへりても 松陰の いはねをつたふ ミつそすゝしき

名処夏

時の間に ならひたちたる 小つくはの 峯うつりする 夕立の雲
花紅葉 下てる影も 夏木立 いとも小倉の やまのやまさと

雨後夏月

夏のよハ さへきる雲の 峰こえて 雨なこりなく しらむ月かな
村さめの はれ行露の 玉櫛笥 あくるかはやく 夏のよの月

3才

第三冊 秋

多豆の毛衣秋

草花非一

七草ハ さらにいはず 花かすに あらぬうけらも つミくはへつゝ
草の名の そのしなわくる 白露の 心おきてそ あやしかりける

暁帰雁

名残あれや よも暁の 陰かすむ 山のはたとる 春のかりかね

径薄

草むすひ する人もなし うちなひく を花かもとの 鹿のかよひち
道ありと たのめぬ人を はたすゝき 風はたさむく まねく庵の外

秋草

1才

花さへも けさハさきけり よひくゝに 虫のやとりの 庭のあきくさ
暮そむる 沢辺の草の 下根より 月も葉のほる 秋の夕露

三五夜中新月色二千里外故人心

といふ詩の句をひともしつゝ、歌の本末のはしめ

に置いて月のうたよみてたてまつれと仰

られければ

狭筵の 露おきあつゝ、 なかむれハ 丸になりけり 望月の影
琴の緒の なかきよあかす めつるまに せむかたもなく 月そふけ行

山はれて こよひはことに 月をよみ 律にしらふる 松かせの声

千浦まで 心をやりて 待をれハ ほからかにこそ 月ハ出ける

1ウ

しむものハ 色とおもふを 月かけも 心にふかく 着にけるかな
けつものをし けたぬもわひし こほるまで しむかたもとの 月の下露
色ふかく 言はの花を さかせつゝ、 こゝろくゝに めつる月かな

みのむし

しめやかに 声そきこゆる 秋のよハ 雨にまされる 露のミの虫
露もらぬ 松のしけミに すかりても 猶ミのむしハ 秋をわふらむ

山家秋来

虫こそハ かつ鳴そむれ 秋はまた たつとはかりの おくの山さと

鹿はまた こゑせぬほとも 山さとに 秋のいりたつ 道芝の露

萩初絵

2才

秋かせハ また吹あへぬ 朝露も 色になりゆく 芽子の初花

秋萩の 花さきそめて さをしかの 妻こふ心 ときめかすらん

文月十日はかり猶あつかりけれハ

あつさこそ さらにそひけれ 草の秋の 心うこかす かせもふかねは

ひこほしの わたりて後も いかなれは あつさなかるゝ 天の川水

林葉初紅

はた寒き 野中にたてる なら林 うす色なから そめはしめけり

雲と見し 花のはやしの はつもみち しくれひまなき ころとなりけり

霧中求路

さしてよる 湊ほりえの 火の気さへ をくらききりに まよふうき舟

2ウ

しほ舟の からろの音ハ 高輪の 湊にまよふ 秋のうきゝり

水郷秋望

朝日山 かけたに見えぬ うきゝりの はれま待らん うちの川長

つくりゑと 見えわたりけり 紅葉の いろとりそふる 天のはしたて

初雁

よろこひの 声をほにあけて わたり来ぬ 五百よの秋の 天つかりかね

秋ことに わたるものから めつらしく きゝなされけり 雁のはつこゑ

秋田

雨風の 時もたかへぬ 秋の田の 瑞穂さかゆる 国のゆたけさ

朝夕の 露のめくみの 色にいて よにもしらるゝ 秋の千まち田

3才

秋朝風

萩のはを 今朝ふく秋の はつかせや 越路のかりを おとろかすらむ

秋夕雲

真木の立 山のはちかく 霧はれて 夕ゐる雲そ 雨をもよほす

秋夜雨

月見むと おもひしものを よもすから 雨さわかしき 竹の下まと

秋野虫

虫の名も きゝなしからに うへなりと おもひしらるゝ あきの野へかな

秋待月

まちわたる 心いられに ほのめくは 月に先たつ 夕つゝのかけ

3ウ

秋惜月

をしむ間に 月はいるへく なりにけり 浪たちさけぬ 沖つ海原

秋顕恋

世にふかく 隠の小野も うらかれて 草の下ねそ あらはれにける

秋恨恋

今ハよの 秋に扇の うみミれハ しめし人香そ 猶のこりける

秋山鹿

しめやかに 鹿の鳴ねそ きこゆなる 山松かせや ふきたゆむらん

秋暁霜

芦かちる 汀の鷺も 暁の 露しもふかき 秋やわふらむ

4才

秋古寺

礎の 苔のいろさへ 秋さひて もみちりしく ミねのふるてら

秋田家

晩稲をも 手ことにとりて 秋もいまハ 門の筈木に かけてほすらむ

秋水郷

大井川 入江の松も 老にけり あはれ幾よの あきの夕かせ

秋旅行

きぬたうつ 音にめさめて 秋もやゝ 夜寒おほゆる 旅衣かな

秋神祇

玉串に 初ほのぬき穂 とりかけて 里の子つとふ 辻やしろかな

4ウ」

第四冊 冬

田豆の毛衣冬

逐日氷厚

けふくゝと 冬の日数に そふものハ あつくなり行 こほりなりけり
よる波ハ こほりのうへに 氷ゐて ほそりも行か 瀧つ山川

雪中梅

雪のうちに けふ咲そむる 梅こそハ かをりのとけき 春の下はへ
ミとしある しるしの雪も のとかなる 春おもほゆる 梅の初花

脩竹冬青

大かたハ 色なき冬も 呉竹ハ 松にゆつらぬ ミとりなりけり
よの中の もてふ竹ハ 霜雪の なかくふかき 緑をそそふ

1オ」

山路氷

柴人も 冬こもりして 紅葉も 氷しまゝの 山陰のミチ

岩ねふミ 朝こえくれハ 音絶て とゝこほりけり 苔の下水

霽雪

大空の ミとりより先 あらはれて 朝日のどけき 松のしら雪
空はるゝ あらしにつれて さらに又 よそにふり行 杜の白ゆき

水鳥多

木々なへて ちりての後も 鳶陰に むれるるかもそ 青はなりける
をしかもの うちむれうかふ 波のあやを 君かミけしに たれかおりけん

閑庭雪

ふりつもる 雪にうゑたる 庭萑 来る人せたみ 軒になれけり
きえすして ふゆ更にけり われハ友 まつとしもなき 庭のしら雪

1ウ」

山路寒月

こほりふむ 山路ハ水の 音絶て 月ばかりこそ 空になかるれ
けしきある 鳥のから声 すさましく 月さえわたる さよの中山

井氷

もひとりの 伴の宮つこ 朝ごとに くだきて結ふ さゐのましミつ
かとのみの 井筒にかけし ひさこさへ うこくへからす つららぬにけり

衾

老ぬれは あつきふすまに まつはりて 霜よのむしの わひつゝそなく

2オ」

霜ふかく よハ更ぬらし 埋火に よりてふすまの したさやくなり

行路雪

白妙の 田豆の毛衣 きたりけり 雪おしふれる 野路のたひ人
ふくかさを さむしとたにも おもほえず ちりかふ雪の 花の下ミチ

月前千鳥

在明の 月のふけひの うら千鳥 鳴てとほよる あかつきの空
あはち鳶 かよひもたえす 幾むらか 月によこきる 浦千とり哉

椎柴

冬をへて ミをおく山に 冬こもる 影たのもしき 軒のしひ柴
大かたハ 吹にしたかふ ならはしを いかにとすさふ かせの椎柴

2ウ」

椎柴の しけミにさけふ このはさる あなさわかしの 嶺の嵐や

霰交落葉

霰うつ あらしの庭ハ ときは木も あへす乱るゝ 音のはけしさ
散はてし 木末ハかせの 音たえて 落はさわかし ふるあられ哉

霜夜聞鐘

埋火も 霜になり行 さよ中に ひくやいつこ やま寺のかね
山寺に おこなふ法のかねさえて おくしもふかき あかつきの声
木枯

山かせの うちふくなへに こからしの その名しらるゝ 杜のした道
ねくら鳥 空にミたれて 真よ中に いとゝゆるきの 杜の木からし

3才

蘆花

たゝよひし 秋のミなどの くれなゐも 白々かへる あしの花かな
花紅葉 うへ夢なれや あしかちる なにハほり江の 冬の夕風

冬旅

東路を たとるゝも 旅衣 はるちかくこそ いまハなりけれ
たき捨し 松の跡さへ つらゝゐて あくるはこねの 杉の下道

垣根寒草

ゆひこめし 里の垣ねの かれを花 かせふくことに ひまそゝひ行
かれたちて おくしもさやく 茅垣の 下根に春や まちわたるらん
わらはの落はかく処

3ウ

おちつもる 木々のあらしの なこりこそ 明日のあさけの 烟なるらむ
里の子か あらしにさわく 霰をも 杜の落はに ましへてそかく

冬の池を見る

あさましく 朽にける哉 玉はやす 露の行への 池のはちすは
原の池 こほりはてゝハ 嵐ふく くゐりに迷ふ 水鳥のこゑ

爐火

埋火の ほのけかすミて あたゝかに きゝなされけり 山水の声
うつみ火の 炭かきくつし かたらふに あかす更行 こし方の春

網代

あしろ人 さむさをわふる 衣手の 田上川に しらむかゝり火

4才

あしろ見に 河かせしのき 都人 ひをのよるゝ とめつゝそくる

柳に雪のかゝりたるを

いつもゝ いつもと柳 むつの花 ちることしらて かゝれとそおもふ

春かせの おもかけ見えて 乱れけり 柳の絮と かゝるしら雪

冬衣

わひなから としへたりけり 雪しもの 冬ハふるきの 皮衣きて
ならひたる 雪見車の 下すたれ あらそひ出す きぬの色哉

冬祝

白雪の つむともつきし 大国の おのつからなる 言のは草ハ
まもります 神の恩頼 ふかき色ハ 言はの 花にてそしる

4ウ

冬暁月

窓をもる 月の光も しらみけり すひつの炭も 下くつれつゝ
とをあまり ふたゝひミつる 有明の 光の間にや としハ行らん

寒雁

かりかねの 霜のおほひ羽 こほるらん 門田にさわく 声さゆる也
声高く 鳴てそわたる 天つかり こほるか田に 落まよふらん

仮字を四ツつゝあかちて人々に冬のうた
よませ給ひけるに羅怒梨流といふ

四もしをたまはりてよめる

のこりなく 今ハちりぬる。むら紅葉 其色ながら こほる山川

5才

しら玉を つらぬるつらゝ、つらつらに つらなりちらぬ 野等のたかむら

簾外雪

常磐木の 梢の雪の あさ風に をすのまとほし 花そちりくる
すゝたれし 軒はの雪の よしすたれ よしあるさまに ふりにける哉

氷上雪

日頃へし 氷やいつら よのほとに 汀もわかす つもるしらゆき
夜のほとに ふるしら雪も あつ氷 鳥の跡さへ ミえぬ池水

雪はれて有明の月清くすみわたりたるを

有明の 月の光を さなからに 野山の雪の うはふよは哉

さへきりて 目にたつ色も なかりけり 月と雪との 曙の空

5ウ」

鷹狩

たちいつる 大鷹かひの すり衣 けふをはれとそ ふるまへりける
はし鷹の 心たかくも 見ゆる哉 君かミゆきの 野への曙

冬祝

御園生の 霜の松かえ いくそたひ 冬のさかえを かそへらるらん
をとめ等か 蚕かひもよしと たなすゑの 御調をいそく 冬の里々

待春

いははる、 わか身の老の 嬉しさに 翁さひして 春をしそまつ
吾門に たてる榎木も はるをまつ 心しられて 烟そめけり

歳暮市

6オ」

つもれるハ 月日のミかハ 山人の はこふ都の 市柴の雪
春をしも 市所せくたつ 民ハ ^(やまびこ) ひとつ心に 待いそくらむ

除夜

あすやまたん けふやをしまん 待をしむ 心まとひに ふくるよは哉
をしミつる 年もこよひと なりはて、 春まつよりハ 外なかりけり
ミにつもる 老の数をも ことならハ 鬼におふせて やらひてし哉
ゆたかなる 春もしられて をかみする 小蓑もかをる 里のうめか、

冬草

根にこもり 春まつ草ハ 老らくの 霜をいたく、 たくひなりけり
くつはむし 今ハ声せず なりはて、 かれふすまゝの のへの冬くさ

6ウ」

第五冊 恋

田豆の毛衣恋

寄水恋

よの人ハ ミなくち／＼に さわかれて 山田の蛙 音をのミそなく
かすかきし かひハ何そも よとみなき 袖の涙の 水くきの跡

寄湖恋

あふミてふ 名をたのみつ、 からさきや からきくいして 岸をへにけり
ひら山や かせふきあれて おもふ事 おほつの沖に まよふうら舟

寄雪恋

しらゆきの とけむ期をたに またすして 我身おもひに きえかへりつ、
こし路なる 白山の雪 年をへて なんと、けさらん 人のこゝろは

1オ」

寄嶋恋

よひ／＼に 舟さしめくる 寫つとり うしや千つなの 乱てそおもふ
わか中ハ おき波とほく はなれ嶋 朝夕たゝに こひ渡りつ、

寄鳥恋

声のミハ まれにきこえて あふことハ いたくほとゝき すきの下陰
暁の とりのおもはん ことさへも うたてまろねの 夜をかさねつ、

寄笛恋

もらさしと くちかためても おもひあまり 声をそたつる 夜はの横ふえ
夜をかさね あひミぬときは ふえ竹の こまほしくのミ 音そなけれける

寄鶯恋

1ウ」

寄樹恋

すまのあまの やくとやくなる もしほ木の つくることなき わか思ひ哉
かせふけハ あをうなはらに たゝよひて うかふ浮木も よるてふものを

思恋

うきてた、 おもひま菅の ねもミすて ふかきこひちに まよふ頃哉
心から おもひ思ひに あちきなく うき人やりと なにかこつらん

寄嶺恋

たとりても こえすハやまし こひの山 わかいるかたの ミねたかくとも

我かたに なひきやこかると 雲のゐか 生駒の峯を うちなかめつ、
寄舟恋

3才

第六冊 雑

田豆の毛衣雑

嶋鳥

さ、波の 立もさわかす をしかもハ むれて翅を かはしまの水
いせしまや とこよの波の しき波に あらふかあさる 田つの毛衣

名所関

よ、へても 其名はかりハ 山水の なかれてとまる 河口の関
すまのうらの 花と月とに ミをすて、 関守にたに なりにてし哉

駿河の国久能山の宮の御修理たくミ

の棟梁をおくる

宮柱 ふとしきたて、 いさを、も たて、かへらん 時をしそまつ

1才

寄水祝

た、へたる 門の磐井ハ 天つ水 いやをちにこそ わきかへりけれ
をさめしる 民の草はも うるほひて 水ゆたかなる 天の龍川

神祇

ものさわに わか君かよそ さかゆなる 大国主の 御国いわひて
宮つこか さしはやしたる 榊葉の 風かくはしき 神の広前

樵夫

船木こり 木をこるまゝに おの、おとの ほとくけふも 暮んとそする
をりくハ 真木こりすて、 天つたふ 雲にうそふく 嶺の杣人

谷間にはし見えたり

橋見ゆる 此谷川の 水上や 斧のえくたす 所なるらむ

1ウ

月日のミ とはにそわたる 苔むして 跡たに見えぬ 谷の岩橋
亀のうた

よの長の ものとし人に ゆるされて 君かみきりに すめる池水
岩測の 心のときき 人こそハ 亀のよはひも かそへつくさめ

鯉

青測の いつ藻の下に ふすこひの うきてあきとふ 晩そしつけき
今くくと 鯉ハひそミて 瀧つせを ミなきりのほる 時をまつらむ

雑草

ふミわけて くる人もなし ふる郷の 草のは山に 関ハすゑねと
行かれて わけこそまよへ かたくくに むすひ捨たる のちの草村

名所渡

故郷の 夢路はるけき 枕香の こかのわたりに まよふ旅人
夜をこめて 誰いそくらん うきりの ふかき淀路の 舟わたりして

名所湊

大船の 鹿子のミなどの 朝ひらき やまと嶋より 追かせそふく
ミなとかせ おひてふくらし 草陰の 阿濃の舟人 声さわく也

流水浮雲根

松かせに 声をあはせて 雲おこる 岩根とよもす 山川の水
千曳なす 岩秀にあたる 瀧波の 雨雲みたれ はる、日そなき

文章

田豆の毛衣文章

第七冊

浜辺にいて、貝ひろふ

かねてもよほし仰られし事なれは朝またきより
人々はまへにいて、波よきほとなる処に軟障(せじょう)など
引めくらしおまし物してわれ見てもひさしくなり

2ウ

ぬと松陰にうそふきあふめりほともなく殿もいて
おはしましてやかて渚ちかく立いてさせ給ひて
海松にまじる貝つものひろひあつめさせ給ふかい
ろくなるを見給ひゑらせて歌ひとつく奉れと仰られ
けれハまつさかしけなるわらはのさしいて、

波の間に

1才

うかみよりけり 春かせの 吹ちらしたる うめの花貝
かをらぬ春かせこそあやしかりけれとおのれひとりおもひ
ほこりたるわかうと

うらのあまの すみふるしたる 板屋貝 いたくかすめる 春のうみつら
なつかしからぬ板

屋かなふはの関ならましハといひくたして又ひとり

延虫^{あま}の子か かつき出たる あはひにそ けふの御あへの かひ
にはありけれ

とて奉りたるはものほしけなりや

あさましと人々もときあふめれとさすかによき御
さかななりけりなと興し玉ふほとにゑひのすさみ
のさへづりもあまたあるめれとさのみハえまねひ

1ウ

あへ更ならむ

胡蝶辞

ころもはるさめふることにあらたまりゆく野山のけし
きうらくと霞たなひきも、ちとり声をつくすハ
いと心ゆく縣のさまなりけり風あたゝかにたもと吹
かへすにつれてひらくとうちひらめくものあり空に
しらね雪そふりけるとうち誦して夕日のまは
ゆさにさしかしたる扇のつまにとゝまりたるを

ミレハ

ちる花と ミレハかすめる そらめにて 春にたはるゝ こてふなりけり
いかなる夢をかむすふらむと

2才

かひなたゆさを念してもてゆくこゝの杜陰を

たちはなれたる所ハおしなへて菊の花さき

ミちたれハ黄々青なとしきたらむやうにて

目もあさむはかりなるに心うつりてゆるきや也

けん立さる行へもしらぬにまた

菊の花の 色にまきれて たつ蝶の 羽かせもかをる 暮そしつけき

いてや白きも黄なるも大きなるも

ちいさきもすへておしからぬはなきをはねひろく

黒き筋いかめしきをとよりよそひて髭なくおひ

たるこそ品おくれで見えしか

2ウ

暁帰雁辞

夕くれ曙春秋とおもひくらへて老のねさめの

つれくなくさむるもあちきなきわ邪なりけり

さすかに何となく心中こゝちしたる枕かみのとし火

の陰かすかになりゆくかものむつかしけれハひまし

らひ窓おしあけたるにかりかねの声なき

かはしかへり行を花を見すてゝとうらみなから

春かすミかすミていふも秋霧のちきりたかへぬ

ためしこそあはれなとおもふほとやうく東の空

むらさきたちて高ねのよこ雲も

今ハとて

3才

わかれも行か 秋のよを 月にちきりて 天つかりかね

とによひいてたるをあはれとはかりきく人しなけれ
ハひとつふたつとかきかそへてかすハたらてそと

うちなかめたる春の曙のあはれなるに友よひ

かはしわたりこし秋の夕をおもひくらふるにいつれを

いつれとも我心からさためかねて

春秋の 夕暁 きりかすむ ふかきあはれに まよふかりかね
かへしも

をりふしにつけてそゝろにあはれすゝむもよのか□
かなりけらし

杜若をかける辞

3ウ」

呉竹のをりかけ垣しめくらしたる家ありほとなき

心地すれハ何の心もなくうかゝひ見るに人けミえねと

さすかに心にくゝすみなしたり桜も今は散はてて

柳の眉おかしけにほころひたるかたはらの水かゝ

ミきよく杜若さかりなりそもく源氏君の垣間見

し給ひし夕くれの小柴垣にハさまかはりたれと

なつかしき 若むらさきの 杜若 かくるゝくまも 見えぬ園生(その)かな

水辺款冬辞

うたてあるかはすの声かな山吹の咲をこりたる峯陰

4オ」

さらす朝霧夕かせにうちミたれていはぬ色にも

はちすいとかしましく啼たちて何かあるなきを水にすむ

蛙花になく鶯と一つかひの歌よミにえらはれけんむかしのさため

こそあやしけれなといふも又口さかなしされとおもふほといはては

はらふくるゝこゝちして

きく耳もゝたぬなるやし くちなしと いひさわかるゝ 山ふきの花
とへとこたえぬとかこちしもうへなり

けりといひつゝ一えたをりたるにはらくとちりうきて

水のひかりきよくなかれゆく岩間にいとしのひやかに

□なしと さのミいふらむ おほかたも 花ものいはぬ ならひならずや

と本末かすかにきゝなざるゝにおとろきて見わたせば例の

4ウ」

歌よミのうかひ出てもゝあはれしりかほつくりたるも
にくしかな

河辺夏月といふことをかける詞

水のほとりに出ですゝみてむとおもふににし河八道とほ
くてくるしかも川は人々むれ来てうるさし中川こそ

よからめとかねてしる人かりしかく此夕暮にといひやり

つるにやり水のめいほくとよろこひながら俄にて人食おろ

そかならむハいかゝはせむよしやといひおこせければ

夕月とゝもに立出て行つるに木のしたやミをくらきかたに

かゝり火けうとからすミなし水の流れ石のたゝすまひ

5オ」

なと心しらすミえておかしき所のさまなり

河ちかき 軒はの萩は 秋かせの ふくはかりなる 夏のよの月

ひるのほと空

すみわたりて涼しともすゝしな興にいるほと山のは紫た

ちたる夏のよのさかこそにくけれ

扇風といふことを

はしめをはりひとしきものはまれなるならはしにて

よにかしこき人達も時をうしなひては跡をくらます

たくひおほかりけり男女のなからひもこそありけるまし

ておほかたのものハなと扇うちならしておもふにこのもの也

う月の末つかたより時めかされて水無月ハミさかり

5ウ」

に世のおほえおほかたならすあけてもくれても手をも
はなたすはた／＼とうちひらめかしこの君ならてハと
誰も／＼おもふめれと萩の声やう／＼耳たちて文月も
末になるまゝ、にいつれかさきにと露にきはひておきそ
められてはて／＼ハ骨のミこち／＼しくなりもて行ものゝすみ
うちすてられて心は花にと老さらほひてうちわふめり
うへしも常なきは世の中なりけりしかハあれと歌絵
など物にかきな夕顔臘月夜なとその名をとめたと
きいやしき人々の手にもならされぬや／＼しきをりにハ先とりいて
うるゝ、なとこそ本末たかはぬ榮なりけれとあちきなき

6才

ことゝもおもひつゝ、けて
秋たちて 露よりほかに おかるゝも ならすあふきの かせはわすれし
かくそゝろなる口すさひも
心のあらましかハ
わすれしの その一言も たのまれす 秋にあふきハ よのさかそかし
とやいはまし

初秋風

あつし／＼といふことをわれも人もたゝ此ころのまくらことにて
あかしくらしつるにいつしか星まつる夜も過て秋まつ心は
はきにあけて天河をもわたらまほしうなむはしちかく
ゐて狩衣のひもしとけなくむねのあたりはうそくなる
さましてはた／＼と扇うちならし水飯なともよほすほと

6ウ

心つくしの秋ハ来にけりとなかめいたす夕月の光さやかなる
に垣ねの萩も軒はのをきもやう／＼うちそよきてふきくる
ものゝ、いとうれしく

夕月の 露ほのめかし むしのねも もよほしかほの 秋のはつかせ

寢覚聞鹿

暁はかりうきものはなしとハ恋する人のいふ事とのミおもふハあら
さりけり埋火かきおこしはいかちなるはいとむくなるにふす
まの下に老かゝまりてこしかた行末おもひつらねていと心ほそく
なんやう／＼春待つて鶯にいさめられて八月と花との
かけふミならしつゝ、心をやりほとゝきすにおとろかされてハ

7才

人つてならぬ声にはこりなとさすかに寝さめもおしからす
ハあらすなんさる中にも山ふかきすまるのかひよと紅葉
ふミわけ妻こひわひて谷間にかへる暁の声いはむかた
なし

秋のよハ ねさめかちなる ことわりの 声あはれなる 峯のさをしか
今ハかくまで老はてゝ松も昔のとかこつ枕に

さと声はるか身にしミてふしかへりて

あかしかね あかつき侘る ともなれや まくらにちかき さをしかの声

7ウ